オーストラリアにおける日本人留学生の適応

小柳　志津*

1．はじめに

オーストラリアにおける留学生の数はfull－fee paying制度[1]の導入以来、オーストラリア政府のマーケティングの成果もあって大幅に伸びている。1987年には1万人に満たなかったのが1997年には15万1千人となり[2]、1998年はアジア経済の不振により14万7千人に減少したものの、依然として成長が期待されている。1998年の内訳を教育機関別にみてみると、49.9％が大学および大学院、25.4％がＴＡＦＥ（Technical and Further Education）などの職業専門学校、8.6％が中学・高校、0.8％が小学校、残る15.3％が英語学校に在籍している[3]。オーストラリアの留学生について最も特徴的なことは、全体の約85％がアジア[4]から来ていることである（表1）。1万7千人のインドネシア、香港をはじめ、オーストラリアで学ぶ留学生の出身国の上位10ヵ国はすべてアジアの国である。アジア以外で千人以上の学生を送り出している国は、アメリカ合衆国、イギリス、チェコおよびスロバキア[5]、パプアニューギニア、ブラジルの5つしかない。

そのような急激な留学生数の増加とビジネスとしての留学生事業の推進から、ほとんどの大学や専門学校、および英語学校では“international student adviser”などの専門職員を置いており、制度としては留学生支援のシステムが出来てきている。しかし、留学生の生活やオーストラリアへの適応などの実態については調査も少なく、支援する側も何をどうサポートしたらよいのか模索している段階である。

異文化適応については、Oberg（1960）の“カルチャーショック”論以来、適応の難しさやそれに伴う心理的、身体的弊害が研究の焦点となってきた。しかし、どのような状態を“適応”とするかは研究者により大きく異なり、適応の定義の明確化の必要性が指摘されている（Ｃｈｕｒｃｈ（1982）、Searl & Ward（1990））。Ady（1995）は従来多くの研究者が使ってきた“幸福感・満足感”を適応の指標とすることについて、「適応との関係に妥当性がない」として否定的であり、またSearlとWard（1990）は、ホスト国での生活技術の習得を中心とする“社会文化的適応”と、新しい環境での幸福感や心地よさを示す“心理的適応”の2つの適応次元を設定して、適応の多面性を説いている。

一方で、日本人の異文化適応に関する研究は山本ら（1986）が行った調査を含め検証的研究は少数しかなく、体験談やエピソードを基に日本人の適応パターンを日本の精神文化から解明しようとする傾向のものが多くを占めている（中根（1972）、近藤（1981）等）。

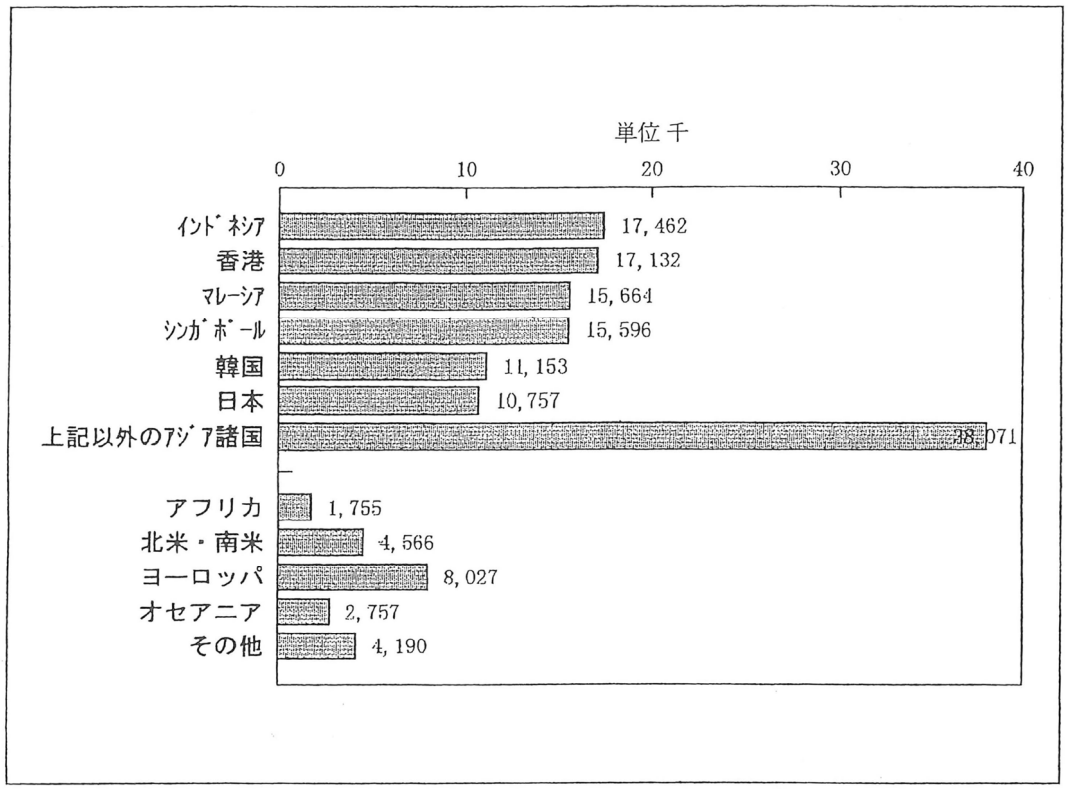
本調査は、オーストラリアにおける日本人留学生の適応の実態を、70人の留学生とのインタビューにより浮き彫りにする、という過去に少なかった検証的研究の1つである。また、面接調査のデータから適応のレベルや状態に影響すると思われる要因を数量分析により抽出し、適応状態と変数の組み合せから適応をタイプ化して、何が異文化適応を左右するのかを考えたい。

2．方法

調査の対象はオーストラリア、特にメルボルンに留学する日本人学生で、より長期的な適応状態を把握するために在豪半年以上経過した者とした。また、動機や環境をある程度絞るために、学生ビザを所有しフルタイムで学校に在籍する者に限定した。オーストラリアの教育機関や留学斡旋

＊RMIT大学大学院言語・国際学学科

表1　出身地域別留学生数



注）その他は出身国不明の者、英国連邦領出身者等が含まれる。
データは“Overseas Student Statistics 1998”に基づく。

機関などの紹介により、高校生15人、英語学校生12人、専門学校（ＴＡＦＥなど）・大学準備コース（Foundation course）生12人、大学生（コースワークの院生を含む）31人の合計70人（女44人、男26人）からデータを得ることができた。

１人当たり２～３時間以上に及ぶ面接調査で、彼らの個人背景からオーストラリアでの生活状況についての情報を得た。１つの項目についてまず自由回答形式の質問をし、その後質問表で数量データを補足する方法を採った。本稿はそのデータのなかでも、量的分析を踏まえたうえで事例を取り上げながら日本人留学生のオーストラリアでの適応の様子を明らかにしたい。

３．日本人留学生の適応の実態

第１節で述べたように、一言に異文化適応といっても示唆する状態は研究によりさまざまである。本調査ではSearlとWard（1990）の研究に基づき、“社会文化的適応”と“心理的適応”の２つの適応次元から日本人学生の適応状態を探った。また、「適応は新環境でのさまざまな領域ごとに起こる」というAdy（1995）の主張に基づき、留学生の環境を“学問”“日常生活”“対人”の３つの領域に分けて調査を行った。

この、異文化滞在を細分化・深化して分析する２つの適応次元に加えて、留学生のオーストラリア人社会への参加レベルを、“アカルチュレーション（Acculturation）”という指標を独自に設けて、より包括的な適応状態を調べた。また、留学生活を続けるにあたって重大な問題を抱えている状態が観察された場合を“不適応”と判断した。

１）社会文化的適応

SearlとWard（1990）による社会文化的適応は、ホスト国での生活上必要な技術をどの程度身に付け支障なく生活しているかを表すものである。FurnhamとBochner（1986）は、異文化での生活

技術（ソーシャル・スキル）の欠如がカルチャーショックの原因であるとしており、適応状態を観察するうえで重要な側面である。また、社会文化的適応はBlack（1987）のいう“objective Adjustment（客観的適応）”や、上田（1982）の“外面的適応”のコンセプトとも共通する。

① 学問領域

学問領域の社会的適応を明らかにするにあたっては学校での成績を中心に質問をした。単位を落とす、等の問題のために、「悪い」「とても悪い」と答えた学生は26％いた一方、「良い」「とても良い」とした学生は37％おり、そのうち２人はいくつかの教科でアワード（優秀な学生に送られる賞）をもらっている。

留学生にとって良い学業成績を修めるというのは簡単なことではないが、留学が目的である以上最低でもコースの修了義務を満たさなければ、彼らのオーストラリア滞在が成功だったとはいえない。しかし、彼らの回答は「思ったより良かった」というものが多く、日本人留学生の学問領域における社会文化的適応は一般に高めであるといえよう。

② 日常生活領域

買い物や交通機関を使うなどの場合に問題があるか否かについて質問したところ、半数が「全くない」残る30％も「ほとんどない」と答えた。実際のところ、スーパーでの買い物やファースト・フード店の利用の際には、必要とされる技術は日本とほとんど変わらない。また、メルボルンの場合は電車やトラムなどの公共交通機関も発達しているので、切符の買い方や路線を把握すれば日本と同じような移動手段が取れる。生活情報については日本語による情報誌も多いので、特に問題は報告されなかった。

この数値から、日本人留学生は日常生活上オーストラリアに非常によく適応しているようであるが、１人の学生がそれについて洞察の深い意見を述べている。「日常で困ることはないけれども、よく考えてみると『困る事になりそうな事はしない』というのが正しいかも知れない。例えば、オーストラリアだとカフェテリアでパンや具の種類から塩胡椒まで自分で指示してサンドウィッチを注文するでしょ。でもそういうのって注文の手順や英語の言い回しとかがわからないと頼めないですよね。だからそんな事して何か面倒が起きると嫌なので、既に出来上がって棚に並んでるサンドウィッチをいつも買っちゃう」。彼は自分のこの手段を“逃げのストラテジー”と呼び、「オーストラリア生活のいろんな場面で使っている」と述べた。この、困難を未然に回避するという“逃げのストラテジー”は、困難から受けるストレスを最小限にするという点で有効であると思われる。しかし、一方で自己の行動を狭めてしまい、異文化であるがゆえの限界を自ら設定してしまう恐れがあるのではないだろうか。

③ 対人領域

日本人以外の対人場面で困難を持っているかどうかを適応の判断基準としたが、約70％の学生が「ほとんど、または、全く無い」と回答した。日常生活領域と同じく数値的には高い適応レベルを示しているが、ここでも“逃げのストラテジー”を使っている例がかなりみられた。「オーストラリア人[6]のクラスメートとはあまり話もしないので特に問題はない」、「既に知っていてこの人なら大丈夫（自分の英語をわかってくれる）という人としか話さないので困る事もあまりない」という学生からの注釈がいくつか寄せられた。

これらの例をみると「困難がない」ことが「異文化生活が順調である」とはいえないことが分かる。「理解されないと困るので話さない」というのでは、その場の困難は回避されるが、長期的にみると異文化との係わりを拒否してしまうことになる。「自己の要望を満たせる技術を持っている」ことが社会文化的に適応しているということなのだが、多くの学生に「技術に合わせて要望を下げる」行動がみられた。

２）心理的適応

心理的適応とは、各自が置かれている環境にどの程度快適さ・幸福感・満足感を感じているかを表すが、言い換えれば、それは各自が受けているストレスの強弱によって測定することができる。社会文化的適応が客観・外面であるのに対し、心理的適応はsubjective（Black, 1987）で内面的（上田、1982）なものだといえる。

① 学問領域

学問領域の心理的適応は、留学生活の大部分を占める学校という学問の環境から探ってみた。オーストラリアでの学校生活を楽しんでいるかどうかを尋ねたところ、学生の70%以上は「学校が楽しい」と答えており、「あまり、または、全く楽しくない」とした者は12%しかいなかった。大多数の学生がオーストラリアでの学校生活を楽しんでいるというのは好ましい結果であり、留学生活が満足のいくものであることを示している。

これを在学校の種類別にみると、高校と大学に通う者に高めの適応がみられた一方、英語学校に通う者に比較的低めの適応が観察された。この理由としては、毎日英語だけ5時間程勉強する英語学校に半年以上も通っているため、彼らのなかにマンネリ感が生まれていることが挙げられる。また、オーストラリア人との接触機会が多いほどさまざまな側面での適応も高くなることから(7)、オーストラリア人学生の割合の高い高校や大学といった教育機関に在学する者に高適応がみられると理解できる。

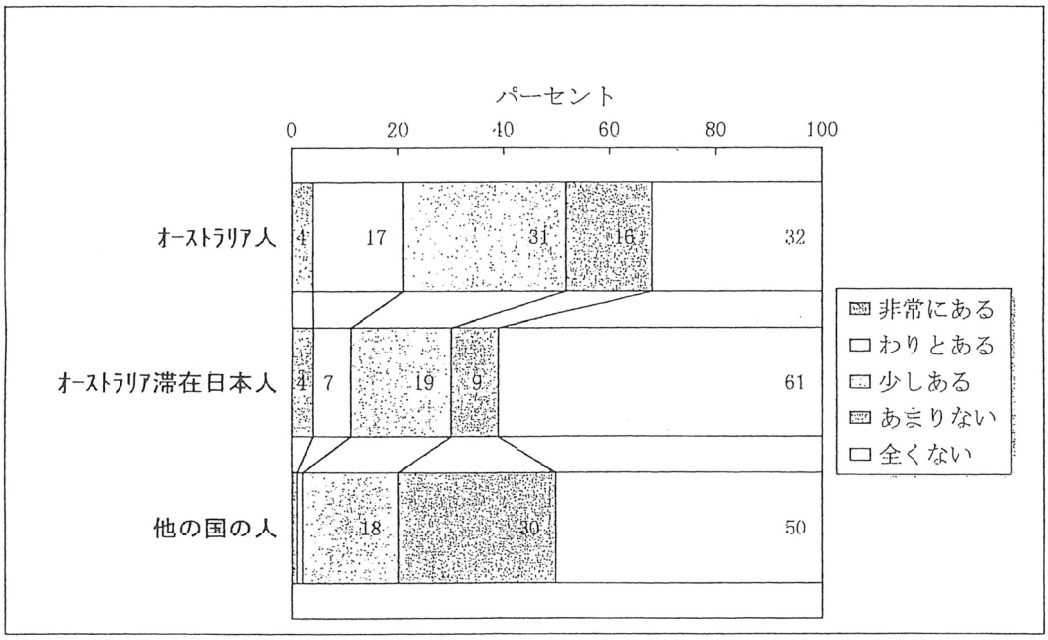
② 日常生活領域

喫茶店やレストランの利用という状況で緊張感や抵抗感があるかを尋ねたところ、66%が「全くない」、16%が「ほとんどない」とし、オーストラリアでの日常生活にあまりストレスを感じていない様子が窺えた。緊張感を示した者も「豪華で高そうな所に行く場合」と述べた者がほとんどであったが、「白人・西洋人しかいないレストランに行くのは気が引ける」と答えた者も何人かおり、民族や人種がストレスの原因になる可能性を示している。

③ 対人領域

対人領域の心理的適応については、話しをする際に恐怖感やためらいがあるか否かを質問し、オーストラリア人とのコミュニケーションの際に感じるストレスレベルを判断基準とした。すると「ストレスが全くない」と答えた者は32%しかおらず、約7割の日本人学生が緊張や恐怖感など何らかのストレスを感じていることが明らかとなった。これは他の適応側面に比べて極端に低い結果であり、日本人留学生が対人領域の心理的適応に一番の問題を抱えているということを示している。コミュニケーション時のストレスについては、“オーストラリア人”、“オーストラリアにいる日本人”、“その他の国の人”と、コミュニケーションの相手を3つのカテゴリーに分け、より深い分析を行った(表2)。カテゴリー別のストレス度合いを比べてみると、日本人留学生は、より強いストレスをオーストラリア人とのコミュニケーシ

表2　コミュニケーション時のストレス



ョンの際に感じていることがわかる。在豪日本人や他の国の人々と接する際には70％および80％の学生が「全く、または、あまりストレスを感じていない」のに対し、オーストラリア人と面する場合では48％に減少してしまう。彼らのコメントから、オーストラリア人と話すときは「緊張する」、「話す内容について準備をしてから話し掛ける」、「自分をプッシュしなくてはならない」など、他のカテゴリーの人々に対する時よりも負担がかかっていることが窺われた。この、ホスト国民であるオーストラリア人とのコミュニケーション時に感じるストレスについては、第6節で考察を加えたい。

3）アカルチュレーション

社会文化的および心理的適応は、各自が“新しい環境”にどれだけ慣れ不自由なく暮らしているか、という状況を表してはいるが、異文化適応の最大の焦点である“ホスト社会”との関係はあまり写し出されてこない。「オーストラリア人とは一切交流がないが、日本人社会または留学生コミュニティーのなかで有意義な留学生活を送る学生が果たして適応しているといえるか」という疑問が残る。そこで本調査では「ホスト社会に積極的に参加し、自分の居場所を見つけうまく機能していること」を海外長期滞在者、特に留学生に望ましい適応の状態と考え、ホスト社会との関係を示す“アカルチュレーション”と呼ぶ指標を作成した。指標測定にあたってはインタビューで得たすべてのデータを基に、特に、学内外での活動、対人ネットワークを中心に判定をした。

結果として、「オーストラリア社会に積極的に参加し、そこに生活基盤を持っている」という高レベルの“アカルチュレーション”が3分の1の学生にみられ、「普段の生活では特に問題はないが、オーストラリア社会への参加に限りがあり、あまり広がりがみられない」という中レベルが4分の1、その他の学生が「オーストラリア人または社会との関わりが少なく、ホスト社会に活動基盤を持たない」という低レベルと判断された。学生たちのホスト社会との係わりを具体的にみてみると、州政府関係の移民福祉団体と日本人コミュニティーを橋渡しすることに主導的に関わっている大学院生、オーストラリア人友人たちを多く作り学校生活を楽しんでいる高校生から、オーストラリア人とは挨拶程度しか交流がない大学生、学校の先生以外顔見知りのオーストラリア人はいないという英語学校生などがおり、オーストラリア人・社会との関係は学生によりかなり多様であった。

4）不適応

“アカルチュレーション”は各自の異文化生活を総合的に考慮しホスト社会との関係を表したものだが、低レベルの“アカルチュレーション”が不適応であるというわけではない。低アカルチュレーションと判断される学生のなかには留学生コミュニティーのなかに生活基盤を持ち、オーストラリアでの生活上も特に問題無く過ごす学生も多くみられた。そこで、強い鬱状態、非常に強度のオーストラリア人・社会に対する憎悪、通常から外れたヒステリックな言動、周囲からの孤立など、明らかにオーストラリアでの生活に問題を抱えている状態が観察された事例を“不適応”と判断したところ、70人の学生のうち15％がこれに該当した。

数人の特定の日本人としか交流がなく閉ざされた人間関係のなかで過ごす専門学校生、ＭＢＡのハードな授業についていくために毎日勉強ばかりで友人たちとの関係も途絶えてしまい、この数日人と話しをしていないと言う学生、ホストファミリーとうまくいかず嫌なことばかりの毎日で一刻も早く帰国したいと訴える高校生等、不適応の状態は個々によりさまざまでありどれも深刻であった。

4．適応に関わる諸要因

前節では日本人留学生の適応状態を8つの切り口から分析した。本節では、彼らの適応レベルに影響を及ぼしていると思われる要因について考えてみたい。

適応の規定因については、Kim（1988，1995）やParkerとMcEvoy（1993）等のモデルを参考に、年齢・性別、以前の異文化体験、動機などの個人背景から居住形態や交友関係まで50以上の変数

表3　適応変数x独立変数の相関

(*=p<.05, **=p<.01, ***=p<.001)注8)

異文化間能力x適応	社会文化的適応			心理的適応			アカルチュレーション
	学問	日常生活	対人	学問	日常生活	対人	
英語力							
-来豪時	.23	.13	.19	-.02	-.04	.36**	.04
-調査時	.33**	.31**	.36**	.03	.11	.27*	.20
コミュニケーションの快適度							
-英語の壁	-.02	-.18	-.23*	.11	-.19	-.28*	-.11
-コミュニケーションの意志	.44***	.18	.02	.06	.28*	.34**	.29*
ホームシック							
-来豪時	.08	.01	.01	.01	.14	-.01	.13
-調査時	-.10	-.08	-.03	-.37**	.08	.13	-.09
エスニシティー							
-日本人としてのマイナス意識	-.03	.08	-.17	.06	-.26*	-.25*	-.13
-エスノセントリズム	-.16	.05	-.16	-.23	.11	.17	-.38**
ホスト文化ルール理解							
学問領域							
-認識	.34**	.22	.29*	.18	.26*	.23	.49***
-行動	.35**	.11	.24*	.05	.07	.26*	.55***
-感情	.22	.08	.21	.19	.02	.09	.49***
日常生活領域							
-認識	.21	.12	.22	.10	.10	.08	.44***
-行動	.33**	.17	.11	.14	.10	.17	.45***
-感情	.32**	.22	.17	.13	.01	.16	.46***
対人領域							
-認識	.24*	.24*	.41***	.17	.14	.37**	.71***
-行動	.35**	.28*	.28*	.13	.21	.43***	.66***
-感情	.30*	.29*	.29*	.13	.13	.34**	.65***

ソーシャル・ネットワークx適応	社会文化的適応			心理的適応			アカルチュレーション
	学問	日常生活	対人	学問	日常生活	対人	
接触機会レベル							
-日本人	-.23	-.08	-.21	-.11	-.14	-.25*	-.37**
-オーストラリア人	.42***	.34**	.31**	.31**	.28*	.25*	.49***
-その他の国の人	-.34**	-.12	-.05	-.10	-.15	-.06	-.31**
対人関係構築レベル							
-日本人	.06	.21	-.14	.06	.04	-.30*	-.22
-オーストラリア人	.37**	.31*	.28*	.14	.22	.52***	.79***
-その他の国の人	-.10	.06	.16	.17	.04	.12	.09

のデータを使って分析した。表3は、7つの適応側面とそれに関係する変数の相関をSPSSプログラムにより計算し、そのなかでも非常に有意な結果が出た“異文化間能力（Cross-cultural Competence)”と“ソーシャル・ネットワーク”に属する変数をまとめたものである。

1）異文化間能力

異文化接触時に発揮される個々人の力量を異文化間能力と呼び、過去の研究では語学力からさまざまな状況に耐えうる柔軟性まで、数々の能力が有効であるとされている。本調査では、“コミュニケーション力”、“ホームシック頻度”、“民族的意識”、“ホスト文化ルールの理解”を中心に調べたところ、“ホスト文化ルールの理解度”がさまざまな適応側面と関係が深いことが判明した。ホスト文化ルール理解とは、オーストラリア特有の文化規範や習慣をどのように理解しているかを認識・

感情・行動面（Taft（1977）、箕浦（1984）、Kim（1988）の理論に基づく）から分析し、5段階で評価したもである。日豪の文化ルールの違いについては皿の洗い方から友人関係の違いまでさまざまな点が述べられ、日本人学生たちの認識面での理解の高さが確認された。しかし、ホスト文化をどのように受容するかという感情面では個人によりかなり差異がみられ、オーストラリア式ルールに好意を示す者から反感を持つ者までいた。ルールの種類にもよるが、行動面までオーストラリア式を採用している学生はあまり多くなく、オーストラリア式に行動すると答えた学生も、日本人に対しては日本式で行動すると述べていた。

数量分析の結果では、全領域の“ホスト文化ルール理解”と“アカルチュレーション”に.44***から.71***という非常に高い有意レベルがみられた。これは、オーストラリア社会に参加し、機能するには、さまざまな領域のホスト文化についての高い認識と感情的受容、それに伴った行動が必要であることを表している。また、対人領域のホスト文化理解と、複数の適応側面との間に強い相関関係が観察されており、異文化に適応するにはホスト国民の対人行動様式を理解することが重要であることを示している。

次に、“コミュニケーション力”といくつかの適応側面との間にもかなり強い相関が観察された。学生の調査時の英語力は社会文化的適応の全領域で、.33**、.31**、.36**と高い有意レベルが出ており、英語力が上昇すれば生活での技術的困難が減少することが裏付けられた。一方で、心理的適応については学生の“英語力”よりも“コミュニケーションの意志”がより強い影響を及ぼしていることがわかる。特に、対人領域の心理的適応は、“調査時の英語力”との有意レベル.27*に対して“コミュニケーションの意志”との有意レベルが.34**と強くなっている。これは、ホスト国民とのコミュニケーションの際に感じるストレスは、学力としてどれだけ英語ができるかということよりも、他人とコミュニケーションをしたいという意志によって軽減されることが窺われる。

また、“日本人としてのマイナス意識”と心理的適応の間にマイナスの相関がみられるが、これは、自分が日本人であることをマイナスに捉える傾向（例えば、西洋人に対する劣等感）が強い者は、オーストラリアでの日常生活、および、オーストラリア人と接した際にストレスを感じやすい、ということである。

2）ソーシャル・ネットワーク

“接触機会レベル”とはクラスメートと同居者の国籍の比率から、毎日のオーストラリア生活において、“オーストラリア人”、“日本人”、“その他の国の人”とどれだけ接触するチャンスがあるかを示したもので、自ら作った友人などはこの接触機会には含まれない。一方、“対人関係構築レベル”というのは学生が来豪以来築き上げた対人ネットワークのことであり、学校や社会での活動を通してできた友人・知人の数、および交流の親密さを聞くことにより評価した。

数量分析の結果、“オーストラリア人との接触機会レベル”と適応のすべての側面で高い相関が見出された。ホスト国民と接触する機会が多い者ほどいろいろな面でホスト文化での生活に慣れやすいということである。反対に、“日本人や他国の人々との接触機会”は適応の複数の側面と負の相関がみられ、それらの機会は異文化適応にマイナスに働くという結果にもなっているが、これは日本人や他国民との接触機会が多い場合オーストラリア人との接触機会が相対して減るためである、と考えたほうが良いであろう。

“オーストラリア人との対人関係構築レベル”と適応の間にもかなり有意な結果が出ている。特に、“アカルチュレーション”との間には変数間で最も強力な.79***という数値が出ており、オーストラリア社会への参加＝オーストラリア人との広く親密な関係、を意味している。オーストラリア社会に参加するにはオーストラリア人との良好な交流が必要であるのは、当然のことである。

しかし、ここで注目したいのは、実際の対人関係構築と接触機会の変数の特徴の違いである。オーストラリア人との接触時に感じるストレス（心理的適応対人領域）と、オーストラリア人との“接触機会レベル”および“対人関係構築レベル”との有意レベルの違いをみてもらいたい。“対人心理的適応”と“オーストラリア人との対人関係構築レベル”の相関は.52***とかなり強い結果であ

るから、オーストラリア人と友好な関係を築いた者はオーストラリア人と接触する際にストレスをあまり感じない、ということは確かである。しかし、一方で“オーストラリア人との接触機会”と“対人心理的適応”の有意レベルは.25*に落ちている。これは、単に接触機会を多く持っていることがストレスの軽減を保証するものではないことを示しているのではないだろうか。

5．“アカルチュレーション”レベルからみるオーストラリアでの日本人留学生の適応タイプ

本調査は、異文化滞在者のホスト社会への係わり方という視点から異文化適応を探ってみた。半年から数年のオーストラリア生活を送っている留学生とインタビューすることにより、“アカルチュレーション”と“不適応”は日本人留学生がオーストラリアでのあらゆる経験の結果もたらされた状態である、という点は確かめられたといえよう。

上記4節でみたように、適応とそれを左右すると思われる変数との間の数量分析では、特定の要因が“アカルチュレーション”のレベルを左右していることが判明した。しかし、一方で、同じような“アカルチュレーション”のレベルでも彼らの置かれた状況（特に“ホストとの接触機会レベル”）が場合によりかなり違っていることもインタビューから明らかである。本節では、この2つの一見矛盾した結果を、関係する変数の特徴を整理し、留学生の適応をタイプ化することにより説明したい。

まず、第4節にて“アカルチュレーション”と非常に高い有意レベルが認められた変数は

－ホストとの接触機会

－ホスト文化ルール理解

－ホストとの対人関係構築

である。次に、これら3つの変数に関係の強い“対人領域の心理的適応”を加えた4つの変数を高・低に単純化し、70人の学生を分類したところ、4人を除く全員が表4のタイプにまとめられた（この5タイプに含まれない4人は、個別事情を考慮する必要がある者たちで、4つの変数以外の要因が強く関係しているためタイプ化の対象から外した）。

表4　オーストラリアにおける日本人留学生の適応5タイプ
---変数の特徴

	多国籍分離型	ホスト回避型	不適応孤立型	適応途上型	ﾊﾞｲｶﾙﾁｭﾗﾙ型
ホストとの接触機会	低	高	高	高	高
ホスト文化理解	低	低	低	中	高
ホストとの交流構築	低	低	低	中	高
心理的適応(対人領域)	低	低	低	高	高
適応種類	低ｱｶﾙﾁｭﾚｰｼｮﾝ	低ｱｶﾙﾁｭﾚｰｼｮﾝ	低ｱｶﾙﾁｭﾚｰｼｮﾝ 且つ 不適応	中ｱｶﾙﾁｭﾚｰｼｮﾝ	高ｱｶﾙﾁｭﾚｰｼｮﾝ

ＳＰＳＳのＡＮＯＶＡ分析によるタイプと変数間の数値

ホストとの接触機会22.479***(***p<.000)

ホスト文化理解（感情）15.050***(***p<.000)

ホスト文化理解（行動）17.053***(***p<.000)

ホストとの交流構築30.707***(***p<.000)

心理的適応（対人領域）2.835*(*p<.05)

1）低アカルチュレーション

“アカルチュレーション”のレベルが低かった者は概してオーストラリア人との人間関係の構築ができていなかった者である。地域活動やアルバイトといったオーストラリア社会との係わりも少なく、オーストラリア人友人との関係も質・量ともに希薄であった。その理由となる要因は彼らのオーストラリア文化ルールに対する理解の低さである。それとともに彼らの対人領域での心理的適応の低さも明らかであり、ホスト文化を消化できないためホストとのコミュニケーションにもストレスを感じ、結果として対人関係が構築できない、という構図が浮かび上がる。

しかし、ここで注意が必要なのは、同じ“低アカルチュレーション”でもオーストラリア人との接触のチャンスがもともと全くない者から、チャンスとしてはあるのだが実際の関係が構築できないという者がいる、という点である。すなわち、“ホストとの交流構築”が同じように低い者のなかにも、“ホストとの接触機会”（授業クラスや居住環境におけるオーストラリア人の割合により示される）が低い者と高い者がいる、ということである。

このグループには、留学生コミュニティーのなかで有意義に暮らす単なるオーストラリア社会への“低適応”者と、異文化滞在自身に問題を持つ“不適応”者が存在する。また、“低適応”者は“ホストとの接触機会”の多さにより２グループに分れる。

① 多国籍分離型

このタイプの学生は、第１の条件となる“ホストとの接触機会”が元来乏しく、周囲にオーストラリア人がほとんどいないことが他の４タイプと大きく異なっている。したがってオーストラリア人との交友関係を構築するチャンスがなく、必然的にホスト文化を理解することも難しい。結果として、オーストラリア社会にはほとんど参加できず適応レベルは低い。しかし、他の留学生との交流機会は多く、その多国籍留学生コミュニティーのなかで自己の場を見つけ有意義に留学生活を送っている。このタイプは留学生のみが在籍し、オーストラリア人学生のいない教育機関、特に英語学校生に多くみられ、調査参加者のほぼ２割を占める。彼らは留学生同士の共通する問題や連帯感によりネットワークを強化し、留学生活にも比較的満足している。

ケース１．美穂[9] ー英語学校在籍、在豪11ヵ月、22歳

美穂は日本で高校を卒業後、交換留学生としてタイに１年間滞在した経験がある。来豪後、語学学校を２度変えており、以前の語学学校は同じ国籍の留学生同士固まり友人もできず楽しくなかった、と言った。しかし今の語学学校では他の国からの留学生とも仲良くなり、留学生活自体も充実してきているということである。オーストラリアでは、同じく留学している従姉妹と一緒に居住しているため、身の回りに日本の物が溢れていることを気にしていた。学校以外の地域での趣味やスポーツの活動に参加したいとは考えているものの、特に自ら探して参加するまでには至っていない。オーストラリア人の友人は１人もなく、オーストラリアと日本の対人関係での違いについては「オーストラリア人と付き合いが無いので、わからない」と言っていた。

② ホスト回避型

ホスト回避型の学生は、多国籍分離型と異なり、専門学校や大学に在籍しているためホストであるオーストラリア人学生と接触する機会は多く持っている。しかし、ホスト文化ルール理解レベルが低いためホストとの接触にストレスを感じ、よって、その接触機会を意識的・無意識的に回避してしまう傾向にある。その結果、ホストとの交流は構築されず、オーストラリア社会への参加も少ないので、適応レベルは低い。しかしながら、英語学校時代からの友人や、在籍学校の他の留学生とのネットワークは強く、多国籍孤立型と同様留学生コミュニティーを形成し、留学生活を有意義に過ごしている。約２割の学生がこのタイプに属する。

ケース２．かおるー大学在籍、在豪１年10ヵ月、27歳

かおるは英語学校に数ヵ月在籍後大学に入学し、調査時には大学生活も１年を超えていた。しかし彼女にはオーストラリア人の友人はなく、クラスメートは留学生に冷たく閉鎖的だ、と感じている。大学入学当初は、オーストラリア人学生と

アジア人留学生との間に隔たりがあることや、日本の大学との授業形式の違いにかなり戸惑った。学外ではアルバイトなどいくつか経験したものの、オーストラリア社会への参加は自分の期待からほど遠い、と語った。一方で、他国からの留学生とは良好な交友関係を築き、映画を見たりスポーツを楽しむなど、行動を伴にすることが多い。オーストラリアでの一番の友人は一緒にアパートを借りているアジア人留学生だそうである。

③　不適応孤立型

このタイプも、ホストとの接触機会は多いが文化ルール理解レベルが低いためにオーストラリア人との接触にストレスを感じており、オーストラリア社会への参加も少ない。しかし、ホスト回避型と基本状況は同じであるが、この型の学生はオーストラリア社会や国民に対し強度の拒否反応を示し、周囲からの孤立や鬱状態など、心理的に危険な症状が現れている。したがって、多国籍分離型やホスト回避型のようなオーストラリア社会への“低適応”ではなく、海外生活への“不適応”と判断され、約１割の学生に観察された。また、このタイプの大きな特徴として、日本人友人はいるものの他国の留学生との交流が薄い、ということが挙げられる。オーストラリア社会と留学生コミュニティーの両方から孤立し、周囲からのサポートもあまり得られていないことが不適応状態の原因と思われる。

ケース３．真理－専門学校在籍、在豪２年８ヵ月、19歳

真理はこの２年８ヵ月の間に、高校、英語学校、専門学校と在籍した。オーストラリア家庭にも２度ホームスティしたが、ホストファミリーと信頼関係を作ることができず、「最悪の経験」と述べた。また、「そのうちの１つの家族は、いまだに嫌がらせ電話をかけてくる」と、確かな証拠無しに話し、いまだに感情を処理しきれていない様子であった。オーストラリアでの留学生活は「何もかも期待外れ」でオーストラリア人友人は無く、「アジア人は嫌い」なので他国からの留学生ともあまり親しくない。彼女によれば、学外の時間は、アパートを一緒に借りている日本人の友人と、そこにしばしば訪れる数人の日本人といつも一緒に遊んでいる、ということだ。彼女のオーストラリアでの生活は、特定の日本人との親密で閉鎖的な関係で占められているのだが、一方ではワーキングホリデーなどで来豪している日本人を「外国だからってはじけちゃって（好き勝手なことして）ばかみたい」と、辛辣に批判してもいた。教育システムなどについてはオーストラリア式を支持したものの、“オーストラリア人は好きでない”という項目に“全く賛成”と回答し、「オーストラリア人は臭い」など、強い反感を表していた。

２）中～高アカルチュレーション

このグループの学生は、ホスト社会への適応に必須である“ホストとの接触機会”を十分に持っている。その接触機会を活かして積極的にオーストラリア文化ルールを理解し、大抵の場面においてそのルールを感情のレベルでも受け入れている。日本と違うオーストラリアの文化ルールについても反感を持たずに「こういうものである」と受容できるので、オーストラリア人と接する際にもストレスが比較的少ないのである。“ホストとの交流構築”のレベルは個人により異なるが、オーストラリア社会との隔たりは少ない。

④　適応途上型

このタイプの学生は、ホストとの接触機会が多いが、ホスト文化理解レベルが高く感情の次元でオーストラリア・ルールを受け入れているため、ホストとの交流によるストレスを感じることも少ない。ホストとも比較的良好な関係を保っており、問題となる事柄もほとんど無い。しかし、行動面はやや低く、オーストラリア式を完全に採用するに至っていない。よって、オーストラリア社会への関わりは非常に高いレベルには達していず、学生たちもより親密な関わりを望んでいる。約４分の１の学生がこのタイプに分類された。

ケース４．陽子－高校在籍、在豪２年５ヵ月、18歳

語学学校で数ヵ月勉強した後、陽子は中学３年に編入し、学校付属の寮に入った。当初は友人もできず日本人の知り合いもなかったので、人と話しをすることさえできない状態が４ヵ月程続いた。そのときを振り返って「今思えばいい経験だったけど、２度としたくない」と話した。２年近

く経った今、陽子はオーストラリア人や他の国からの留学生の友人も多くでき、学校では音楽クラブに所属してオーストラリア社会に十分溶け込んだようであった。しかし、「オーストラリア人友人とは個人的な悩みは話せない」と感じ、友情形態の違いから「オーストラリア人の友達は“親友”と呼べるのかよくわからない」と言った。また、自ら授業中発言したり、はっきりと断ることなどには、いまだに抵抗を感じていた。

⑤ バイカルチュラル型

バイカルチュラル型は、ホスト文化理解レベルが認識・感情・行動のすべての次元で高く、ホストとの接触機会にストレスを感じることがない。どの程度オーストラリア式の行動をとるかは人により異なるが、この型の学生はホストと良好な関係を築き、オーストラリア社会にも積極的に関わりを持っている。文化規範の違いによるストレスを感じることなくホスト社会に参加する、という異文化適応の最終段階にいるといえよう。しかし、ホスト文化規範の受容は日本の文化規範を捨てるということではなく、このタイプの学生のほとんどは、「日本人に対しては日本式に振る舞う」と答えている。約4分の1の学生がこのタイプに属する。

ケース5．裕ー大学在籍、在豪3年、21歳

大学に入学する前に、裕は語学学校に半年、大学準備コースに1年在籍した。大学準備コースでは、勉強の量と大学に受からなければならない、というプレッシャーに困難を感じはしたものの、来豪以来新鮮で興味深い刺激のあふれる留学生活を楽しんでいる。大学と地域のサッカークラブを通して多くのオーストラリア人友人を作り、飲みに行ったりパーティーをしたりと、余暇をともに過ごすことも多い。他の国からの留学生との交流も活発で、彼らからインドネシア語を習い、かなりしゃべれるまでになった。文化ルールの違いについては不可視的な点に多く言及し、理解の深さを表していた。オーストラリア式、日本式のどちらを行動として採用するかという点については、「人に不快感を与えなければ、自分にとってためになる方で行動する」と答えた。オーストラリア人に対しては自己主張や積極性等をかなり表に出して接している一方、インタビュー時には礼儀正しく応答し、話し方や態度はいたって日本式であった。

6．適応のタイプ化が示唆するもの

1）異文化適応の規定因

上記の適応タイプの分析から、異文化適応過程に関わる重要な変数の関係が浮かび上がる。まず第1に“ホストとの接触機会”はホスト社会への適応にとって必須条件である。一般的に人間関係は自分が普段接する人々と作られるのであって、留学生しかいない生活環境（主に学校）に置かれた場合、オーストラリア人と交流を持つのは難しい。それでも地域やボランティアなどの活動を通し自ら機会を作っていくことは可能だが、それには積極性や努力、および、そういった場を探す技術が必要である。この適応への第1条件を満たしていないグループが“多国籍分離型”だ。

しかし、“ホストとの接触機会”は適応促進要因である一方、ストレスを引き起こすことにもなる。対人領域の心理的適応が低いということは、そのストレスが強いということを表しているといえよう。表2に表れているように、日本人留学生はオーストラリア人とのコミュニケーションにより強いストレスを感じているのだが、これは以下のように説明できる。まず、オーストラリア人はどう行動するか、また、自分はそのなかでどう行動したらよいのか、といった“ホスト文化ルール”の理解レベルが低い場合、相手の行動や態度が理解できず、また自分自身も理解してもらえずにストレスを抱え込むこととなる。ホスト文化ルールを理解していないと、異文化滞在者はホスト国民のとった行動を自国のルールで判断し、不条理であるとか拒否された、といった心境になる。例えば、オーストラリア人に直接的に「ノー」と言われて傷ついた、と述べた学生がかなりいた。これはオーストラリアの文化規範では「意志をはっきり相手に伝える」というのは通常の行為だが、「遠回しに相手に伝える」という日本式の文化ルールが身についている学生は、無意識のうちに傷つく、ということになる。場合によっては「私が何か悪いことをしたのではないか」というように、文化ルールの混乱が起こるわけである。

それとともに、ホスト文化ルール理解が低いために、ホスト国民への接し方がわからない場合にも、高度のストレスをもたらすこととなる。例えば、オーストラリア人のクラスメートにいつに電話をするのが適当かわからず、迷った末に結局電話するのをやめた、といったケースもいくつか報告されている。ルールがわからないために間違いを恐れ、結局自分からの働きかけをやめて受け身の状態になってしまう、ということである。このように接触機会がストレスとなり、無意識・意識的にオーストラリア人との接触を避けてしまっているのが“ホスト回避型”と“不適応孤立型”であろう。

“適応途上型”と“バイカルチュラル型”は、こういったストレスを克服しながらオーストラリア人とコミュニケーションを進め、次第にホスト文化ルールの理解を深めていった者達である。結果として良好な対人関係をホストとの間に構築している。

このような文化ルールの違いからくるストレスについて、Gudykunst（1988,1995）は“anxiety/uncertainty management理論”と題して、相手を読めない、出方が分からない等の懸念が大きい場合、コミュニケーションを回避する可能性が高い、としており、今回の調査結果と合致する。また、Berry（1990）は、ホスト文化との接触が“Acculturative Stress（適応ストレス）”となり、異文化滞在者の精神的健康を低減させる可能性がある、としている。日本人留学生の適応ストレスの原因については、この“文化ルールの違い”の他に“非英語母語話者”であることや“民族的違い”が考えられるが、これらについては今回のデータを基に、より深い考察を別途進めたいと思う。

2）オーストラリアの留学生受け入れ国としての特徴

日本人留学生の適応パターンを観ることにより、ホスト国であるオーストラリアの留学生を受け入れる側としての特徴をいくつか指摘することができる。まずは留学生コミュニティーの大きさである。オーストラリア全体で15万人弱、ビクトリアだけでも約４万２千人にものぼる留学生は、地方の高校でこそ多くはみられないが、専門学校や大学では学生全体の数％から10％以上を留学生が占める学校もある。また、彼らは学校内だけでなく学外でも広く繋がりを持っており、留学当初在籍した英語学校時代の友人、友人の友人、というように、留学生コミュニティーは拡大する。加えて、上記で分析したように、異文化滞在者はホストとの接触にストレスを感じやすいので、彼らは同じ境遇にあってストレスの少ない留学生同士の交流に流れる傾向があり、特有の絆や共通点で強く結ばれている。

こういった背景が“多国籍分離型”や“ホスト回避型”を生み、彼らがオーストラリア社会と深く係わらなくても快適で有意義な留学生活を送れる要因となっている。留学生が自国文化を維持しホスト文化に染まらなくても生活できるというのは、オーストラリアのマルチ・カルチュラリズム、移民国家という性質からも分析できるが、第１の要因はこの自国文化でもホスト文化でもない“第三文化”ともいえる留学生コミュニティーの大きさであろう。日本人留学生のなかには、オーストラリアについてよりも、他のアジア文化に触れ理解が深まったと述べた者も多かった。しかし、留学の副産物として他の留学生と人脈を作ることは重要であるが、逆にアジア系が大多数の留学生コミュニティーが強まることはホスト国民であるオーストラリア人学生との交流を鈍化させる間接的な原因ともなっていることは否定できない。

オーストラリアの特徴のもう１つは、留学生であっても社会の一員として同等に受け入れる土壌がある、という点である。“バイカルチュラル型”の学生にみられるように、友人関係から学内外での活動まで、オーストラリア社会の一員として参加することが可能である。短期滞在者としての制限を感じることなく、オーストラリア人学生と同じように活動できる基盤がある。これは「異なるものへの寛容」をモットーとする多民族・多文化国家としてのオーストラリアの特徴であり、「fair go」精神の現れであろう。

しかしそれは誰にでも機会が与えられると同時に、誰も特別扱いはしない、ということである。１人の高校生が「オーストラリアでは留学生だか

らといってちやほやされることはない。日本では学校中の皆が見に来るのに」と、特別でないことに対し期待外れの様子を表していた。逆説的ではあるが、この「誰も同じに扱う」という態度が日本人学生にとってみれば歓迎されていない、と感じられ、初期の人間関係の形成にマイナスになる可能性もある。「自分から働きかけないと誰も相手にしてくれない」と嘆く学生にとっては、同等に扱われることが冷たく感じられるのだろう。

7．おわりに

本稿はオーストラリアに留学する日本人学生を通して“異文化適応”と“オーストラリア社会”を考えてみた。概してオーストラリアは留学生を含めた異文化出身者、新参者に対しても平等に接している社会である。しかし、その土壌をどこまで活かせるかは日本人留学生個人にかかっている。結局のところ、高・低・不適応の分岐点となるのは「いかなる対人関係を新しい環境で作ったか」ということであった。積極的にホスト社会に参加するか、または留学生コミュニティーに留まるかは、個人が感じるオーストラリア人に接する際のストレスレベルと関係が深いことがわかるであろう。このストレスをいかに軽減できるかがホスト社会への適応の鍵である。

オーストラリア社会に参加することは、オーストラリアに対する研究や理解を深めることになる。今後も留学の機会を生かしてどんどんホスト社会に参加できる学生が増えることを期待する。

[注]

(1) オーストラリアは2つの大学を除きすべての大学が国公立であり学費の多くは国が負担していたため、以前は留学生枠が設けられていた。しかし、1985年に留学生は学費を全額自己負担するという“Full－fee Paying制度”が承認され、それと同時に留学生枠も撤廃された。これにより私費留学生を大量に受け入れることが可能になり、ビジネスとしての留学産業が盛んになるきっかけとなった（Back & Davis (1995) 参照）。

(2) Department of Education, Training and Youth Affairs 発行“*Overseas Student Statistics* 1998”による。大学および大学院の学生数については3月31日時点の在籍者数、その他の教育機関については年間に在籍した学生の総数が含まれる。

(3) 日本の高校を卒業後大学や短大等に在籍したことがない場合、Foundation courseという大学準備コースを受講しなければならないが、このコースは専門学校のカテゴリーに入っている。

(4) トルコ、中近東諸国を含む。旧ソ連諸国は含まない。

(5) “*Overseas Student Statistics* 1998”の分類では1国として集計されている。

(6) “オーストラリア人”について調査者側から特に規定はせず、質問があったときのみ「オーストラリア生まれ」とした。

(7) 4節2）参照。

(8) *は有意性が認められることを表し、***は相関がかなり強い有意レベルであることを示す。

(9) ケーススタディで使われる名前は、プライバシーの保護のためすべて架空のものである。

[引用文献]

(1) Ady, J. C. (1995) Toward a differential demand model of sojourner adjustment. In Wiseman, R. L. (ed.), *Intercultural Communication Theory* (pp 92-114). California, Sage.

(2) Australian Education International (1999) *Overseas Student Statistics 1998*. Canberra, DETYA.

(3) Berry, J. W. (1990) Psychology of acculturation : Understanding individuals moving between cultures. In Brislin, R. (ed.), *Applied Cross-Cultural Psychology* (pp.232-253). Newbury Park, Sage.

(4) Back, K. J., & Davis, D. M. (1995) Internationalisation of higher education in Australia. In Wit, H. (ed.), *Strategies for internationalisation of higher education* (pp.121-155).

(5) Black, S. J. (1988) Work role transitions: a study of American expatriate managers in Japan. *Journal of international business studies*, 277-294.

(6) Church, A. T. (1982) Sojourner Adjustment. *Psychological Bulletin*, 91(3), 540-572.

(7) Furnham, A., & Bochner, S. (1986) *Culture shock: Psychological Reactions to Unfamiliar Environments*. New York, Routledge.

(8) Gudykunst, W. B. & Hammer, M. R. (1988) Strangers and hosts; An uncertainty reduction based theory of intercultural adaptation. In Kim, Y. Y. & Gudykunst, W. B. (eds.) *Cross-Cultural Adaptation - Current Approaches* (pp.106-139). California, Sage.

(9) Gudykunst, W. B. (1995) Anxiety / uncertainty

management (AUM) theory: Current status. In Wiseman, R. L. (ed.), *Intercultural Communication Theory* (pp.8-58). California, Sage.

(10) Kim, Y. Y. (1988) *Communication and Cross-Cultural Adaptation: an Integrative Theory*. England, Multilingual Matters.

(11) Kim, Y. Y. (1995) Cross-cultural adaptation: An integrative theory. In Wiseman, R. L. (ed.) *Intercultural Communication Theory* (pp.170-193). California, Sage.

(12) Oberg, K. (1960) Cultural shock: adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*, 7, 177-182.

(13) Parker, B. & McEvoy, G. M. (1993) Initial examination of a model of intercultural adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 17, 355-379.

(14) Searle, W. & Ward, C. (1990) The prediction of psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 449-464.

(15) Taft, R. (1977) Coping with unfamiliar cultures. In N. Warren (ed.) *Studies in Cross-Cultural Psychology* vol. 1 (pp.121-153). London, Academic Press.

(16) 近藤裕、1981年、「カルチュア・ショックの心理－異文化とつきあうために」、大阪、創元社。

(17) 箕浦康子、1984年、「子供の異文化体験－人格形成過程の心理人類学的研究」、東京、思索社。

(18) 中根千枝、1972年、「適応の条件－日本的連続の思考」、東京、講談社。

(19) 上田宣子、1982年、「異国体験と日本人-比較文化精神医学から」、大阪、創元社。

(20) 山本多喜司編、1986年、「異文化環境への適応に関する環境心理学的研究」、昭和60年度科学研究費補助金（一般研究Ｂ）研究成果報告書。

［1999年９月１日受理］

Cultural adjustment of Japanese students studying in Australia

Shizu Koyanagi
[Graduate school of Language and International Studies, RMIT University]

The number of international students in Australia has been increasing since the introduction of full-fee paying system. In 1997 there were 150 000 such students. Despite this population size, the reality of cultural adjustment of international students is not fully understood. The purpose of this paper is to examine cross-cultural adjustment and investigate the factors that could have impact on the level of adjustment. The research is based on 70 Japanese full-time students.

There is considerable confusion in the literature regarding the term "adjustment". This paper investigated "cultural adjustment" using the three concepts: (1) socio- cultural adjustment that indicates operational comfortableness in the new context; (2) psychological adjustment that indicates emotional comfortableness in the new context and (3) acculturation performance that indicates positive involvement of the individuals with the host society. For socio-cultural and psychological adjustment, "new context" was divided into three domains; academic, daily life and interpersonal. While a relatively high level of adjustment was reported in all socio-cultural aspects, more difficulties were discovered in psychological aspects, especially in the interpersonal domain. The level of acculturation performance that is an overall measure of all adjustment aspects varied widely amongst the students. About half the students were involved with Australian society to a relatively high level, and the majority of the rest were enjoying and fulfilling themselves in the international student community. However, there were several students who were isolated from both the Australian society and international student community and showed symptoms of maladjustment.

Several variables emerged as significant factors determining the level of acculturation performance. One was "host cultural rule understanding" that suggests the extent that the students know and accept the Australian cultural rules and behave accordingly. The second variable was "interaction opportunity with Australians" that reflects the daily opportunities that the students have to mix with Australians. Third, "established interaction with Australians" that indicates the width and depth of interpersonal network with Australians. The fourth variable was "psychological adjustment in interpersonal domain" that shows the stress level in communicating with Australians.

An acculturation typology for Japanese students was developed based on the most significant variables. With the exception of less than six percent, all students could be considered as being members of five types; "happy international isolate", "happy host avoider", "unadjusted marginal", "happy adaptee" and "bi-cultural operator".

The paper concludes by analysing the relationship between cultural adjustment and characteristics of Australia as host country for international students.